フィールド（現場）からの風 ㉕③

宮田守男

大北地域にとって糸魚川市が重要だと再認識し、復興のため多くの人に訪ねてほしいと願っている

9月上旬、富山・松川七橋めぐりと糸魚川市大火災跡地の視察研修に参加する。降雨等により楽しみにしていた橋にまつわるエピソードなど船長が名調子で語る松川七橋めぐりは中止となったが、日本海の海風を楽しむ事ができた。だが、漁業を巡る影響なのか、買いたい衝動にかられる鮮魚には出合えなかった。以前は、海際の海産市場に並ぶ鮮魚の買い物は楽しみだったが、私たちを取り巻く流通の素晴らしさか、山国信州でもおいしい鮮魚を買う事ができる時代。海産物市場の衰退が海辺への旅の楽しさを半減させている寂しさを切に感じてしまう。

今回の最大の目的は、平成28年12月22日に発生した大規模火災地・糸魚川市を訪れ、観光消費する事で少しでも糸魚川市が元気になってほしいとの願いからだった。市街地中心部の糸魚川駅から北側に位置する中華料理店から火災が発生、「焼山おろし」・「姫川おろし」などと呼ばれる強い南風により北の日本海方向に延焼。鎮火まで約10時間、鎮火まで約30時間を要し、全焼120棟を含む約4万平方㍍が延焼、実況したテレビ画像に驚きを感じた人も多かったはずだ。

大北地域と糸魚川市の関わりは深い。多くの文化は、糸魚川が玄関口。塩の道と呼ばれるほど経済面でもつながりが深かった。糸魚川周辺の海岸での海水浴は今でも鮮明な記憶として残っている。昭和40年代は、鉄道の時代。大糸線に乗車して、海の香りが漂う飲食店街にも出かけ、船員が立ち寄るバーでの一杯は、別世界の楽しさを感じさせた。また年末年始に使う魚の買いだしで年の喜れの糸魚川のにぎわいは、活気にあふれていた思い出の地だった。

今回の参加者の胸中は、糸魚川市を思いやる気持ちで満ち溢れていた。自分達の行動で支援したいと、糸魚川市内で夕食会を企画した。夕食会の途中、被災箇所の復旧が気になり、現場を見ていると地元の方から声がかかる。「どちらから」の問いに「白馬からです」と答えると満面の笑顔で「糸魚川を元気にするために出掛けてくれてありがとう」との言葉が返ってくる。多くの観光資源を焼失して、元に戻す事はできないだろうが積極的に出掛けて地場産業の復旧の一助になるよう、大北地域の多くの人が、いろいろな企画で訪れてほしいと願った旅でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

白馬村出身の職員から、糸魚川市の大火からの再建の歴史説明を受け、今回も再建すると確信する事ができる